

2019（平成 31）年度 三重短期大学 法経科第 2 部入試（小論文） 解答例

問題一（20 点）

問題を設定し、学習するマシンを活用して得られた判断を実行すること、未知の状況であっても、意思決定し前に進むこと、学習するマシンを使ったとしても使わなかったとしても、結果の責任を常にとること。（95 文字）

問題二（20 点）

与えられた問題に対して、その解き方を考案したり、その上で判断したりするような仕事である。ただし、その問題の目的は定量化可能であり、この問題に関わるデータは既に大量に存在している。（89 文字）

問題三（60 点）

解答例 1

学習するコンピュータの登場により、人間と機械との新しい協調関係が生まれ、人間の問題解決能力は飛躍的に向上するという筆者の意見に私も賛成する。

これまで人間がしていた仕事をコンピュータに任せられることは多いと考える。例えば、レストランでの注文を電子画面で受けたり、大人数の配膳を人間に代わって客のところに自動カートで運んだりする様子を見たことがあり、人間がするよりも効率的だと考える。ただ、そこで人間にしかできないこともあると考えた。それはやはり、コミュニケーションを必要とする仕事である。マニュアル化できる仕事はマシンに任せられるが、正解がない問題への対処や人間味のある臨機応変な対応は、人間でないと今のところ不可能だと考える。これが私達の文化を作っているのだとも考える。現代のこうした状況は、まさに、人間と機械との新しい協調関係が生まれる過程だと考えられる。（389 字）

解答例 2

学習するマシンに適切な問題を与えることで、人間の問題解決能力は飛躍的に向上すると筆者は述べているが、私はそうは考えない。

人間がする仕事とコンピュータに任せられる仕事の区分は曖昧だと考える。むしろ重要な仕事は人間がするという考えとは全く逆になっていることもある。例えば、飛行機の操縦をマシンが行い、それを人間が確認するという試験が行われている様子を見たことがある。操縦という人命に関わる重要な仕事であるにもかかわらず、それを人間がしないということは、すべてコンピュータに任せられるということである。

こうした状況の進展で、人間の問題解決能力の向上よりも、コンピュータの実力の向上が顕著に見受けられるようになると考える。また、学習するマシンが大量のデータから最適解を出せるようになれば、これは人間の誤った選択の防止にもつながるが、これは人間の問題解決能力の向上とは違うと考える。（399 字）